平和であることに感謝し、自己の生き方を見つめ直す

１　対象学年　小学校５年生（総合的な学習の時間）

２　ねらい

終戦から７４年を迎え、戦争を経験した世代が減少し、その悲惨さや恐ろしさを語り継ぐことが難しくなってきている。わたくしたち教員自身も戦争を経験しておらず、児童に生の声を伝えることは難しい。

本学年で戦争について学習する教科単元はほとんどない。社会の授業で「沖縄のくらし」を学習したときにコラムで教科書に登場する程度であり、太平洋戦争で沖縄県民が受けた苦痛や今も続くアメリカ軍用地の問題についてなど、詳しくは書かれていない。戦後しばらくの間、沖縄がアメリカの領土であったことを知る児童はほとんどいなかった。本学級の児童に、「戦争について知っているか」というアンケートをとると、「あまり知らない」「全く知らない」と答えた児童が約 80％にのぼった。また、戦争についてどんなことを知っているかと聞くと、「家などが燃えた」「たくさんの人が亡くなった」「爆弾が空から落ちてきた」「国と国の争い」との答えに留まった。児童は、「戦争はこわい」、「平和は大事」だと言うが、戦争の悲惨さや平和の大切さを本当に理解しているわけではないと考える。

１学期に「戦争と平和」についてのアンケートをとっていると、戦争について知識のある児童が話し始め、戦争についてあまり知らない児童は興味をもってその話を聞いていた。そこで、児童の興味を生かし、まず戦争と平和について、資料やインタビューを通して調べ、まとめ、発表することで、戦争についての知識を深め、戦争の悲惨さの理解を深めたい。本校の学区は、大家族もしくは近くに親戚が住んでいる児童が９割を超えているため、戦争を経験した曽祖父や曽祖母にインタビューをすることができると考える。また、身近な地域での戦争体験が多く掲載されている「焼け跡に立つ虹」の話を授業で紹介し、児童が戦争や平和を考えるきっかけにしたり、調べ学習の一助として活用したりできると考える。

このような活動を通して、戦争の悲惨さを知り、今の平和な世の中が当たり前のことではない、平和を大事にしていこうという気持ちを育てたい。そして、自己の生き方を見つめ直す機会にしたい。

３　指導計画

時	テーマ	学　習　内　容
1	戦争について知る	・　事前アンケートの結果を知り、現在の自分たちの戦争や平和に対する意識を確認する。 ・　教師の説明や資料をもとに、戦争について知る。 ①　名古屋大空襲 ②　戦時中の食べ物 ③　神風特攻隊 ④　原子爆弾 ⑤　世界で続く争いとそれに巻き込まれる子どもたち

		・　教師が提示した写真や資料、説明をもとに追求したいことを決める。 ・　調べ学習の計画を立てる。
2～5	戦争について調べ、まとめる	・　戦争について、本やインターネット、インタビューを通して調べる。 ・　プリントで「焼け跡に立つ虹」に出てくる小話を紹介する。
6～7	戦争について調べたことを発表し、まとめをする	・　プレゼンテーション形式で全体に向けて発表をする。 ・　調べ学習をしたり、友だちの発表や戦争体験談を聞いたりする活動を通して、学んだことや感じたことをまとめ、自己の生き方を見つめ直す。

４　実践のまとめ

（１）第１時　戦争について知る

はじめに、事前アンケートの結果を児童に伝え、これから戦争の悲惨さを知り、平和の大切さやありがたさについて考えていくことを伝えた。本時では、教師が作ったプレゼンテーションを使って、授業をすすめた。まず、児童に「今の日本は平和だと思いますか」「どんなときに平和だと思いますか」「平和とは何ですか」と問いかけた。児童からは、「日本は平和だと思う」「ニュースで他国の戦争の様子を聞いたとき」「平和とは争いがないこと」という答えが多く返ってきた。ただ、「どんなときに平和だと思いますか」という問いの答えには、少しつまる様子が見られた。

①　名古屋大空襲

燃え盛る名古屋城の写真を提示し、何が燃えているのか問いかけると、「屋根が見える」「家が燃えているのかな」という声が聞こえた。現在の名古屋城の写真を提示すると、児童からは「名古屋城は戦争で燃えたんだ」という驚きの声が聞こえた。名古屋城が焼け落ちた名古屋大空襲の話を、「焼け跡に立つ虹」の「電柱から血が」から抜粋して、当時の名古屋の街の様子を提示しながら、児童に読み聞かせた。児童は話を聞いて、今の名古屋の街との違いに驚き、言葉を失っていた。

【炎上する名古屋城】

②　戦時中の食べ物

漫画「はだしのゲン」の一部や、戦時中の食事の写真を提示した。学校のグラウンドを子どもたちが耕して畑にしていたことや当時の食べ物の少なさ、貧しさを伝えた。また、食べ物が少ないゆえ、さつまいものつるや葉、イナゴやカエルなどを食べていたことも伝えた。教師が過去にイナゴやさつまいものつるを調理したときの写真を見せた。

特に、イナゴ料理に児童は驚いており、「食べたくない」との声が多かった。さつまいものつるは「食べてみたい」という声が多かった。

【漫画「はだしのゲン」より】

【イナゴ料理】

③　神風特攻隊

戦闘機（零戦）に乗って、敵に体当たり攻撃をする部隊のことであることを当時の写真を提示しながら伝えた。児童からは、驚きとともに、「なぜそんな攻撃をするのか」「自分から特攻隊になろうと思ったのか」などの疑問が出てきた。また、映画「永遠のゼロ」を観たことのある児童がいたことから、映画の内容を少し紹介してもらった。

④　原子爆弾

教師が広島の平和記念資料館で撮った写真を提示しながら、広島、長崎に落とされた原子爆弾の説明をすすめた。資料館の写真は見るに堪えないものが多く、それだけ悲惨な攻撃であったことを児童に伝え、刺激の少ないイラストを中心に話をした。それでも、児童からは「夢に出てきそう」という声が聞かれた。

【広島平和記念資料館での資料】

⑤　世界で続く争いとそれに巻き込まれる子どもたち

今も続く世界の争いとして、コンゴ民主共和国を一例として取り上げた。コンゴの中でも最も危険な地域では、非常に多くの子どもたちが重度の栄養失調に陥っており、命の危険にさらされている。また、子どもたちが「使い捨ての道具」として働かされており、子ども兵として子どもどうしが銃口を向け殺し合ったり、人間地雷探査機として、地雷が埋まっていそうな場所を歩かされたりしていること。さらには、麻薬やアルコー

ルによって、子どもたちが洗脳されているところもあることを伝えた。子どもたちからは、「ひどい」「なんでそんなことを」「それを思うと日本は平和だ」という声が聞かれた。

最後に、自分が気になったこと、もっと知りたいことをあげて、授業を終了した。以下は、本時を終えた児童の感想である。

- 戦争の壮絶さやすごさ、はげしさがよくわかった。気持ち悪すぎてはきそう。
- 戦争がこんなに大変だとは思っていなかったのでびっくりした。ごはんをまともに食べられない、子どもでも戦争をしなければならないなど…今の日本は本当に平和だと心からそう思った。
- 命を大切にしたくなった。
- 子どもたちは防空壕などにかくれて助かる…と思っていたけど、戦わせたり、子どもをロボットみたいにしたりしている国があるとわかった。思った以上に大変で、生きているのもすごいなと感じさせられた。
- 戦争だけはしたくない。できれば韓国や北朝鮮とも争いをしたくない。もちろんほかの国とも、と思った。
- 今も国外では戦争が続いていることを知って、とても怖くなった。今の日本は平和だけど、いつ戦争がおこるかわからないから、とてもおそろしいと思った。二度とこんなことがあってほしくない。

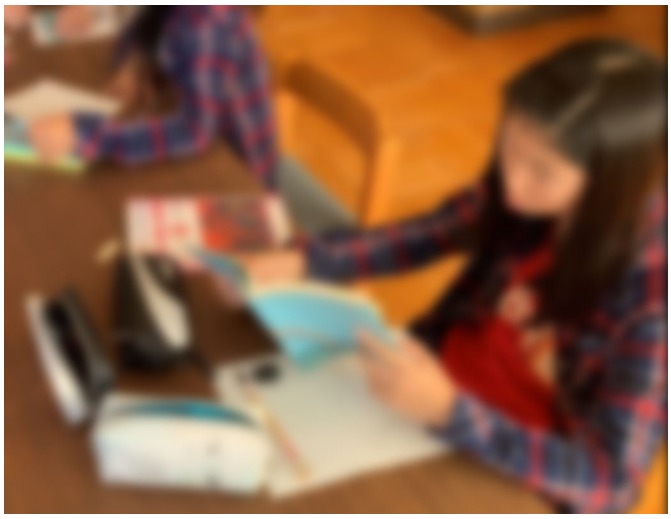
（２）第２～５時　戦争について調べ、まとめる

図書室の本やインターネット、インタビューなどで、自分が選択したテーマについての調べ学習をすすめていった。児童にとって初めて知ることが多く、調べ学習の途中、「先生、こんなこと知っていましたか？」「先生、こんなことがあったんですね」といった声が聞かれ、たいへん意欲的に調べ学習をすすめていた。しかし、難しい言葉や知らない言葉が多いので、わからない言葉は必ず教師に質問するようにさせた。

また、「焼け跡に立つ虹」の話を第１時で紹介したため、興味をもって読む児童が現れた。休み時間に読んだり、調べ学習の一資料として活用したりする児童の姿も見られた。

また、調べ学習と並行し、プリントで「焼け跡に立つ虹」の話をいくつか紹介したり、さつまいものつるを調理したりした。

本校は、パソコン操作に長けている児童が多く、発表方法はプレゼンテーション形式ですすめることにした。

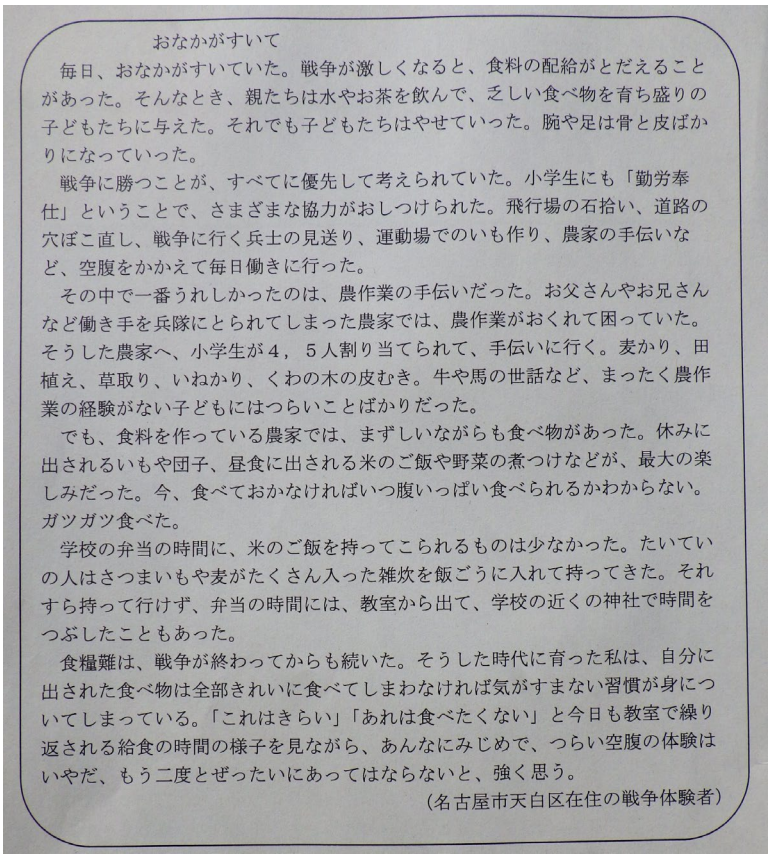


【「焼け跡に立つ虹」を読む児童】

【つるの皮をむく児童】

【調理したつるを食べる児童】

さつまいものつるの調理では、下処理から調理まで意欲的に取り組む姿が見られた。手が真っ黒になったり、べたべたになったりと、戦時中の苦労の一つを知ることができた。本実践では、つるをきんぴらにして食べ、児童からは「おいしい」と好評であった。しかし、「昔の味付けはどうだったのか」「調味料はあったのか」と新たな疑問が生まれた。のちに、それを調べてきた児童がおり、調理法の一つとして、砂糖と油で味付けをして食べていたということがわかった。さらに、調べるなかで、醤油を一気飲みして、徴兵されないようにしていた人がいたことを知り、学級で紹介した児童もいた。



おなかがすいて

毎日、おなかがすいていた。戦争が激しくなると、食料の配給がとだえることがあった。そんなとき、親たちは水やお茶を飲んで、乏しい食べ物を育ち盛りの子どもたちに与えた。それでも子どもたちはやせていった。腕や足は骨と皮ばかりになっていった。

戦争に勝つことが、すべてに優先して考えられていた。小学生にも「勤労奉仕」ということで、さまざまな協力がおしつけられた。飛行場の石拾い、道路の穴ぼこ直し、戦争に行く兵士の見送り、運動場でのいも作り、農家の手伝いなど、空腹をかかえて毎日働きに行った。

その中で一番うれしかったのは、農作業の手伝いだった。お父さんやお兄さんなど働き手を兵隊にとられてしまった農家では、農作業がおくれて困っていた。そうした農家へ、小学生が４，５人割り当てられて、手伝いに行く。麦かり、田植え、草取り、いねかり、くわの木の皮むき。牛や馬の世話など、まったく農作業の経験がない子どもにはつらいことばかりだった。

でも、食料を作っている農家では、まずしいながらも食べ物があった。休みに出されるいもや団子、昼食に出される米のご飯や野菜の煮つけなどが、最大の楽しみだった。今、食べておかなければいつ腹いっぱい食べられるかわからない。ガツガツ食べた。

学校の弁当の時間に、米のご飯を持ってこられるものは少なかった。たいていの人はさつまいもや麦がたくさん入った雑炊を飯ごうに入れて持ってきた。それすら持って行けず、弁当の時間には、教室から出て、学校の近くの神社で時間をつぶしたこともあった。

食糧難は、戦争が終わってからも続いた。そうした時代に育った私は、自分に出された食べ物は全部きれいに食べてしまわなければ気がすまない習慣が身についてしまっている。「これはきらい」「あれは食べたくない」と今日も教室で繰り返される給食の時間の様子を見ながら、あんなにみじめで、つらい空腹の体験はいやだ、もう二度とぜったいにあってはならないと、強く思う。

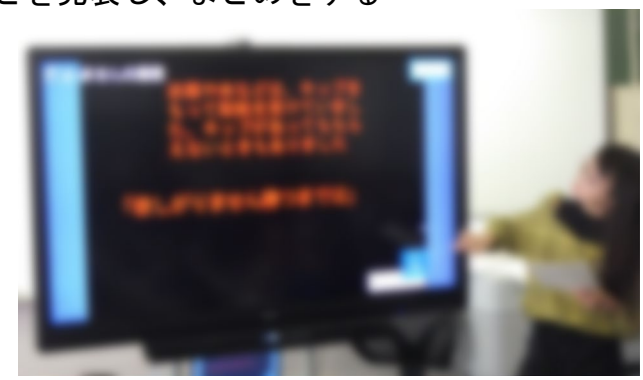
（名古屋市天白区在住の戦争体験者）

【プリントでの紹介】

戦争のことを調べたり、「焼け跡に立つ虹」の話を聞いたりしていくなかで、「戦争中は今の時代ほどたくさん食べられなかった」「好き嫌いせず食べないといけない」「給食を残すなんて、もったいない」と児童が口にするようになり、給食を減らす児童が少なくなり、クラスでの残食がなくなった。また、学校の体験活動の一つとして、毎年 10 月に行われている稲刈り体験や脱穀体験では、落ち穂がもったいないと拾ったり、脱穀しきれているかを入念にチェックしたりする姿が多く見られた。食べ物に感謝したり、お腹いっぱいになるまで食べられることが当たり前の今の時代に感謝したりする姿が見られるようになった。

（３）第６～７時　戦争について調べたことを発表し、まとめをする

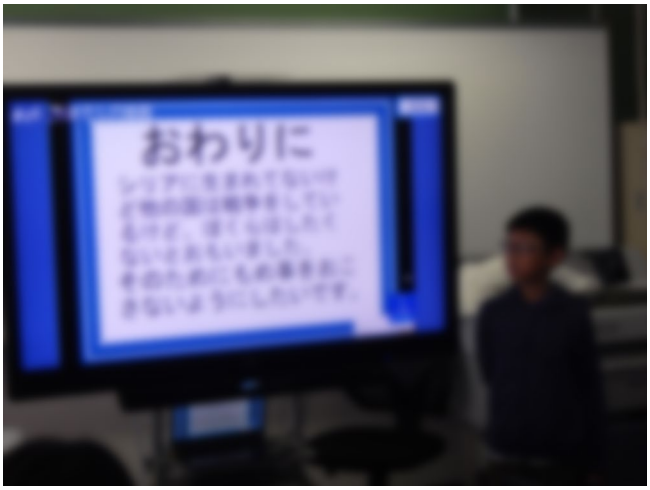
電子黒板を使い、全体に向けて発表をさせた。児童は、どうしたら学級のみんなに伝えたいことを伝えることができるだろうかと、試行錯誤を重ねてスライドを作ったり、何度もリハーサルをしたりして準備をすすめていた。発表を聞く児童は、真剣にスライドを見たり、発表に耳を傾けたりしていた。



【スライドを使って発表する児童】

また、発表の最後に自分の思いや考え、決意を発表する児童がほとんどであり、平和への意識が高まったと感じられた。

【真剣に発表を聞く児童】



【最後に自分の考えを発表する児童】

すべての発表が終わった後、事前に行ったアンケートと同じものに取り組ませ、さらに平和学習を通して学んだことや感じたこと、これからの自分の生き方を考えさせた。

以下は、平和学習を終えた児童の感想である。

- いものくきや豆かす、生き物など、今では信じられないものを食べていたことが分かった。お米がいっぱい食べられないのはかわいそう。きらいな食べ物でも、文句を言わずに食べようと思う。
- 戦争でうえ死にした人も戦死した人も、今戦争をしている国もあると知り、日本という平和な国に生まれてよかったと感じた。支援する募金があったら、募金したい。
- 日本、世界で戦争を一生やらないでほしい。ささいなことで死にたいと思わず、戦争時代を思い出し、死んでいった人の分も一生懸命生きたい。
- みんなの言うとおり、戦争中に生まれることなく、今の日本にいてよかったと思う。戦争中の日本もいやだが、日本以上に苦しい生活をしている国に生まれなくてよかった。アフガニスタンやシリアに生まれてしまった子がかわいそうで言葉にならない。今、生きていることに感謝をし、わがままややりたい放題をなくして、生きていきたい。

・　平和学習を通して、戦争の大変さが改めてわかった。絶対もうこんな戦争をしたくない。どの国とも仲よくして、受け入れ、分け合えるようになってほしい。一人ひとりが人のことを考えられるようにすることが大事だと思う。思いやりがあれば、戦争なんて絶対におきないと思う。

５　実践の成果と今後の課題

発表会終了後に児童が行ったアンケートで、「戦争についてどんなことを知っているか」という問いに、「戦争中の食べ物」「太平洋戦争でのいろいろな作戦」「なぜ太平洋戦争が始まったのか」「少年兵や少女兵という子どもの兵隊がいること」「沖縄戦での出来事」「戦争のための訓練や学校生活」「動物まで兵器として使われていること」「子どもが地雷探査機として使われていること」など、多くの答えが返ってきた。自分が調べたいテーマについて調べ、発表する活動を通して、そのテーマについての知識が深まったと考えられる。また、友だちの発表を聞くことで、自分のテーマ以外のことも知ることができた。

「焼け跡に立つ虹」を戦争の身近な話として第１時で使用したり、プリントで児童に紹介したりしたことで、「焼け跡に立つ虹」を休み時間に読んだり、調べ学習の中で参考にしたりする児童が現れた。「焼け跡に立つ虹」は、調べ学習の資料の一助になったと考える。また、「焼け跡に立つ虹」の話を真剣に読んだり、聞いたりしている姿から、戦争や平和について考える資料として、活用することができたと言える。しかし、「焼け跡に立つ虹」は難しい内容が多いため、教師が内容を一部抜粋したり、解説を加えたりと、ひと手間加える必要があると考える。

以上のように、継続して戦争について調べたり、「焼け跡に立つ虹」を読んで平和について考える時間を設けたりしたことで、児童の発言や態度が変わってきた。本実践の最後に書かせた児童の感想には、「つらいことがあっても、戦争時代を思い出し、一生懸命生きたい」「一人ひとりが人のことを考えられるようにすることが大事だと思う」「思いやりがあれば、戦争なんて絶対におきないと思う」などと書かれていた。児童の中で、今平和であることを当たり前と思わず、平和を大切にしないといけないという意識が芽生え、自己の生き方を考えるよい機会になったのではないかと考えらえる。

この平和学習で考えたこと、見つめ直した自己の生き方を、今後の学校生活につなげていくことが、今後の課題である。